

新聞『階級戦』と劔持貞一

—— 1920年代サンフランシスコ・日本町 ——

田村 紀雄

The Kaikyusen and San Francisco Japan Town in the 1920s.

Norio TAMURA

Summary

The Kaikyusen, a Japanese American monthly newspaper was issued in San Francisco between 1926 and 1928. The newspaper was published in Japanese language and it was controlled by the Japanese leftist wing group within Japanese immigrant workers at the time. These immigrants were scattered along the Pacific coast of the United States. Their occupations covered various field such as ; day-workers, school boys, farmers and other miscellaneous laborers. The newspaper gave them propaganda of the “Comintern” policies from Moscow. Although the circulation of newspaper was estimated only a few hundreds copies, but the contents of its propaganda made a strong influence over the conservative Japan communities.

序 本論の目的・範囲

1920年代後半から、1930年代にかけて、アメリカで活動した日本人共産主義者と、その新聞活動については、これまで幾つかの研究がある¹⁾。しかし、その特殊な活動のため、必ずしも全容が解明されたわけではない。

なかでも、アメリカ共産党日本人部の成立に大きな役割を果たした劔持貞一（健物貞一²⁾）のサンフランシスコを中心とした活動には不明の部分が多い。劔持は、加藤氏等によれば、1900年（明治33）、岡山県生まれ、早稲田大学卒業後、1923年7月渡米、1924年アメリカ共産党に入党、新聞『階級戦』、（のち『在米労働新聞』、さらに『労働新聞』と改称）の編集者（editor）として活躍、逮捕されたあと、ソ連へ「亡命」、スターリンの「血の粛正」で42歳で生命を落した。

アメリカ共産党は、国際共産主義運動（コミンテルン）の一支部とされた。これは、日本もふくむすべての国の党が同様だった。日本人は、アメリカ共産党の中では、これまたスペイン語、イタリア語を話す移民と同様、民族部（ナショナル）の中の日本人部に属した。剣持は、その第13区（サンフランシスコ）の活動家で、1931年米国を去ってソビエトに移動するまでの約7年間、みっちり活動している。

この剣持については、戦後、論述した主なものは、次のような文献である。

文 献

1. カール・ヨネタ『在米日本人労働者の歴史』新日本出版社、1967年。

ここでは、剣持について、数行の記述がある。『階級戦』を創刊したこと、「アメリカ共産党員として送還命令をうけた最初の日本人」であることが記述されている。『階級戦』の英文名は Class War である。17号で1回だけ英文頁を発行、このときこのようなタイトルにしている。

2. 竹国友康『リトルトウキョウ物語——日系コミュニストとその子孫たち——』四季書房、1978年。

竹国が、米共産党員だったハロルド・オノへのインタビューを通じて得た「剣持」（ここでは、剣持と表記）の活動を紹介している。しかし、聞き書きの常として、検挙の事情も、違反法規も定かでない。ただ剣持と最初に、17名の「日本人」が次々と米国を発ち（追放されて）、ソ連へ向かったが、「彼らはそのまま消息を断ち、行方不明になっている」と、悲惨な最期を暗示した。

3. 加藤哲郎『国民国家のエルゴロジー』平凡社、1994年

加藤の本書は、ソ連に渡り、スターリンの粛正政策で、銃殺されたり、強制収容所で病死、虐殺された日本人、その家族たちをひとりひとり追跡した労作である。剣持はじめアメリカから渡った日本人共産党員は、「スパイ」等のでっちあげで、銃殺その他、ほとんど全員が消された。本書では、剣持については、「1938年11月26日以前に逮捕され、以後行方不明」とだけ記している。

4. 加藤哲郎のホームページ「ケンモツ・サダイチ探索」

加藤のその後の必死の探索で、KGB記録その他の新しい資料が発掘され、1938年4月15日逮捕され、刑期8年の懲役刑に処せられて、収容所に送られ、1942年9月8日死亡が確認された。ソ連「亡命」以降の詳細は加藤によってはじめて明らかにされた。

本論文は、その剣持によって発刊された左翼紙『階級戦』の創刊事情と、1920年代後半のアメリカの移民政策の強圧化、不況と失業に悩まされる日本人労働者、十分な対応策のなかった日本町や左翼の活動を明らかにすることを目的としている。



第1図 1927年のサンフランシスコ日本町の中心ラグナ通りと
ポスト通りの交差点からフィルモア通り方面をのぞむ
(出典：サンフランシスコ公共図書館)

1920年代桑港日本町の言論

アメリカ大陸でもっとも古い日本町（ジャパン・コミュニティ）のひとつである桑港（サンフランシスコ）の日本人居住地域は、海岸に近いマーケット通りからサンフランシスコ大地震（1906年）の破壊等を経て山の手へ次第にあがっていった。（第1図）

このコミュニティには、日本語の新聞としては、『日米新聞』『新世界』の二大日刊新聞と、短命の複数の新聞が、日本人・日系人（アメリカ生まれの米国市民権保有者）にニュース、話題、娯楽情報、商品広告等を提供していた。1919年のいわゆる「排日土地法」、1924年の「排日移民法」により日本人移民には、厳しい環境ではあったが、1920年代後半は、それなりに経済的に定着し、社会的・文化的にあるていど安定した日常は生まれていた。

日本人・日系人の人口も増え、定着してゆくと、そこには、いずれの社会にもみられる社会関係も発生する。階級関係、貧富、多様な政治的立場やイデオロギー、信仰やビジネス上の利害、人間関係の齟齬、小集団間の縄張り、など、要するに、社会そのものが小さく再現されている。政治的対立や階級意識の発生から、社会主義的活動が生まれたとしても、不思議ではない。しかも、日本における政治状況と、アメリカにおける状況との双方の影響を受け

て複雑に体现することになる。

共産主義グループと日本人

日本の共産主義者に大きな影響を与えた片山潜は、「アメリカ共産党の創立」に参加したとされるが、その事情は詳らかでない。米共産党は、各国の党と同様、ご多聞にもれず自身の内部対立、分裂抗争に加えて、ソ連の「国益」やソ連党のエゴイズム等により翻弄された上、米国内の根強い社会主義嫌いの風土や、指導者の思想変化によって複雑な歴史をもっている。「古い党」(old CPA)といわれる1919年以前の結党は、米社会党(SPA)の流れを汲む。記録によれば³⁾、1919年10月時点の党員数は27,341人、それが1920年1月には1,714人に激減している。離合集散も、これまた各国の共産党の常道であったが、それでも周辺部を吸収して維持してゆく。この離合集散に大きな要因のひとつとなったのが言語である。

アメリカは、もともと移民の国だが、1920年代に第1次大戦や各国の政治的混乱からヨーロッパから受け入れた大量の移民労働者の中には、その祖国での政治的迫害を受難したアナキスト、社会主義者が相当数含まれていた。しかも英語が話せない。

従って、米国の共産主義運動では、言語問題は組織上の重要な基軸であった。1919年結成された「古い党」の前身ともいえるSPA(米社会党)は、言語別連合であったが、1920年に生まれた「合衆共産党」(UCP)は、言語別方針を採らなかった。1921年に結成した「米労働者党」は、地下にもぐった共産主義者の「第2組織」として、党員を増加させ、1925年には、16,325人までにしたと公表されている⁴⁾。

ここでは、言語別連合体の組織方針をもっており、その分布を次のように発表している。

英語	2,282人
アルメニア語	132
チェコスロバク語	295
エストニア語	70
フィンランド語	6,410
ドイツ語	350
ギリシア語	256
ハンガリー語	509
イタリア語	331
ユダヤ	1,447
ラトビア語	434
リトアニア語	815
ポーランド語	121

ロシア語	870
スカンディナヴィア語	211
南セルビア語	1,109
スロベニア語	14
ウクライナ語	622

日本語の統計は表れてない。また、言語別といっても簡単ではなく、ユダヤというのは、イディッシュ語だと思われるが、南スラビック語が、セルビア語だけかどうかはわからないが、セルビア語としておく。このデータのもとには、コミンテルン資料等から編纂した *The American Labor Year Book* (1926) のデータだとある。ここで、これらの資料を示したのは、米国共産党が、いかに言語別党運営を基本方針にしていたということを述べるためである。

「地下」の「中央幹部会」と「おもて」の党との間には、ダブルメンバーシップを保ちつつ、それぞれの機能で動いていたと思われる。それでは、この時点で、日本入党員は、どのようなものであったか。

日本人・日系人は、西海岸や東海岸の大都市で、ばらばらに、米国共産主義者と接触し、ときに入党していたと思われる。ただ、左翼的労働運動である IWW にも早くから多くの日本人労働者が加入していた。

カール・ヨネダによると、1913年3月アラスカの最南端の町ケッチカンのキャナリー労働者の中に IWW 第283支部が生まれ、100人近い日本人が加盟していた⁵⁾。ケッチカンは、カナダのプリンス・ルパートと目と鼻の先で、ここには日本人労働者が集積していた。

1924年のロバート・パークの「日本人調査」⁶⁾で、田村が発掘した調査原票群の中にワシントン州内の22カ所の製材所等の日本人調査がある。そのひとつクラウン木材会社での調査で、1917年には、全日本人労働者が IWW に加入し、白人と協力して二度のストライキをおこなったとしている。

1919年、片山潜は、ニューヨークの日本人青年10数人を米共産党に加入させたというが、創草期の米党は、ご多聞にもれず派閥抗争とイデオロギー論争で、党員は1万人を切っていた。西海岸のリーダーの一人が劔持貞一であった。

劔持は、日本の大学を卒業後、米国へ渡りパークレーで日雇い労働しながら学んでいたようで、ヨネダによれば1924、5年にはすでに共産党員であった。その劔持を編集長にして1926年にサンフランシスコで『階級戦』が月刊でスタートした。共同編集者は、池田豊耕である。

私は、カール・ヨネダから多くの資料のコピーと一緒に、『階級戦』のコピーの寄贈を受けたが、創刊号から第3号までは、欠落していた。何らかの理由でヨネダの手許にはなかったようだ。同紙の第7号に「1号・2号を所有している人への買い戻し」の広告が見えるので、ヨネダのコレクションには、当初からすでに欠落していたものと思われる。それにつけても、

あいつぐ入獄、移動労働、強制収容所生活、第二次大戦中のインドへの従軍と、激しく、きびしい生涯であったのに、貴重な資料を大切に保存し続けたヨネダには頭がさがる。アメリカの日本人・日系人社会主義運動の記録は、ヨネダの努力抜きには語れない。

いずれにしても、『階級戦』の当初の発行部数は、200～300部くらいだったようだ。第4号（1926年9月5日）の編集子のコラムによると、同紙は、3号でゆき詰り廃刊を考えたが、仲間に押されて4号から再刊、コストは自腹、無料配布とある。ヨネダによると、創刊号から18号までの『階級戦』は、剣持と池田の編集、これが本論文の対象期間である。その形式は、第2図である。

『階級戦』のタイトルでは、入手されていない3号分を含めて、18回、ほぼ月刊で発行された。（第1表）題字のロゴが1回変わり、印刷所、発行所も1回変更した。活字の変化ですぐわかる。理由は後述する。

この18回の発行で、もっと大きな変化は記事の内容だ。

編集者の剣持は、すくなくとも剣持の署名入りでは、一本も書いていない。署名のある池田豊耕、福永麦人（ばくにん、本名與平、無政府主義者バクーニンからとったとされる）、箱守改造（本名平造）、影山静子ら。いずれも本名または、それに近い「党名」で記事を書き始めたが、次第に無署名になってきた。

理由は二つ考えられる。ひとつは、FBI、地元警察その他米国側の治安当局の反応が予想以上にきびしく、署名上は「地下」にもぐったのである。

もうひとつは、日本町の生理的ともいえる拒否反応である。

文章は、お世辞にもうまいといえず、拙劣な上に、日本町の指導者への個人攻撃、中傷が激しく、反感や名誉毀損になりかねない代物だったからだ。

『階級戦』は発行し始めたが、情報（取材）網も、編集技術・技倆もなく、少数のスタッフが書きなぐったわけである。池田豊耕が巻頭で、ニューヨークの「パサイック紡績工スト」支援に、『階級戦』の同人が赴き、1.5万の女子工員の前で演説したことを、その写真とともに報じている。ここで演説しているのは、まぎれもなく剣持である。（第3図）

池田がちからをこめて書いているのは、日本町の指導者、それも日本語新聞への揶揄である。この一般の日本語新聞をターゲットとした批判記事は、さいごまで変らない。桑港で発行されていたのは『日米』、『新世界』、それに『北辰』改題の『桑港週報』等であったが、『日米』へは、とくにきびしかった。

その池田、もともとハワイの農業労働者で、新聞記者に転進、『階級戦』を離れた1930年代には、サンフランシスコで『公論』の発行人などになる。

『日米』の新聞の影響力が、それだけ大きかったからだが、『階級戦』も言論機関として仲間入りを欲したのである。

『日米』新聞社は、安孫子久太郎社長以下54名の社員を擁する（第4図）堂々たる企業で、

日五月一年七十二百九千

階級戦

日米社説を駁す

瀧尾 枯泉

過般桑佛青主編に於ける北加青年連席大會の總括的な、一般的な批判の意味の下に日米新聞は去る十二月四日其の社説論に仰々しく「呼客青年の思想的傾向」と云ふ一文を掲げた。彼は先づ呼客青年の思想的傾向を大體三つに分け其れに對し一々珍腐な批判を試みて居る。彼が掲げし三つの思想的傾向とは即ち社會主義思想及び融合團結せんとする思想的傾向とである。余は今是等部門に涉つての一々の批判に對し云々するの暇を持たぬ。唯だ余は余の立場として社會主義思想に對する彼の根據なき説説を指摘し、意圖ある中傷誹謗に對し記者の輕率なる信認を警めんとするものである。

兄長の鑑はあつたが、今彼の社會主義思想に對する批判を原文の儘此處に掲げると左の通りである。

「社會思想の影響之は呼客青年諸君の讀書が多く日本の出版物であり其れ社會主義を説くものが多いゆゑであらう。日本の社會には目下流行的に獨も杓子も社會主義を口にせぬと新人の仲間に入られぬといふ云々の様な空氣がある。然しそれも之は歐米の思想の日本に影響したものであつて、日本の國民的生活態度を背景として其の流行が受け入れられて居る。云ふ迄もなく社會主義は日本に於て最も盛んな思想である。」

以上は其の一文を要約する時我々は直ちに記者先生が如何に社會科學に對し無智であり、然して彼の社會主義に對する見解の如何に及層淺薄なるか、窺ひ知られるのである。

成程我々在米青年の或る一部の間に社會主義的傾向を有せる者のある事は事實である。然し乍ら斯うした青年の思想的傾向が記者先生の臆測するが如く唯よつてのみ得た何等其處には實際的背景を有せず體験も認識も含有しない思想的反映であるとするのは甚だしき妄斷と言はねばならぬ。少く其斯うした思想的傾向を有する青年の大半が二十歳前後迄若き資本主義的シノブ氣中に育てて來た者である。否例ひ其思想が讀書によつて得た思想的な副産物としても其がため此等青年の思想乃至運動の存在の意義がなくなるわけでは決してない。青年は其の諸々たる新氣と其の理想に直進する熱なる熱情の裡に東洋に東洋に老練者の如き性質に束縛されざるが故に、外界から來た刺激を靜かに受けて、其の内に蓄積されて來て居る。

世界革命の史實を。如何なる國の改革革命と雖も其の導火を完成せしむるに青年の勇氣と熱情とが如何に重大な役割を演ぜしかを。更に先生は今日の所謂社會主義思想なるものが吾國に於て一なる一部の人の間に於ける一時的な氣まぐれの流行思想かの如く妄信して居る事である。勿論余も雖も社會主義思想が永久的な絕對的なものであると思つて居ない。云ふ迄もなく社會組織と云ふ者は一時的であつて歴史的なものである。其れは常に辯證法的形式即ち正、反、合、或は肯定、否定、否定の形式を通じて人類が其の真誠を欲しない限り無限に進化して行くものである。然して時代思想、それは各時代、時代に於ける社會的或は物質的（經濟的條件の如何によつて必然的に派生される思想）たる社會組織（經濟關係）の變遷と共に移動或は消滅すべきものである。

今日の所謂社會主義思想と雖も經濟關係階級對立の認識により必然的に派生したものである。してこれ又自然の勢と云はねばならない。

見よ。我國今日の經濟界や如何、今や吾國資本主義經濟は其の内に内包し、凡ゆる矛盾を露出、就職難となり資本主義の無政府的生産は生産過剰となり物價の暴落労働者の窮乏となる。今や我が資本主義經濟は凡ゆる餘裕を併發し爾來底の苦みを生じつゝある事實と相俟つて國民は苦境のどん底に呻吟しつゝあるのである。斯る現實に據息し北が階級戦を目撃する國民は殊に

階級戦の論證に何等の實證も云ふに對する批判の的となつて居る。然るに其れは余の論證に對する批判の的となつて居る。然るに其れは余の論證に對する批判の的となつて居る。

第2図 『階級戦』第8号, 1927年1月5日

第1表 『階級戦』略年表

主 な 執 筆 者		
No.4	1926-9-5	(225 Valencia St.) 池田豊耕, 麦人, 相島良
5	10-5	池田豊耕, 麦人, 相島良
6	11-5	南八郎, 瀧尾枯泉, 影山静子, 箱守改造, 麦人
7	12-5	麦人, 南八郎, 相島良, 鬼狂生
8	'27-1-5	(PO Box 3726 1212 Market St. 題字ロゴ変更) 瀧尾枯泉, 麦人, 箱守改造
9	2-5	高木不可止, 南八郎, 麦人, 箱守改造, 藤原保
10	3-5	山辺清 (NY), 箱守改造, 麦人, 南八郎, 佐々木三一郎
11	4-5	荻野誠也 (NY), 南八郎, 箱守改造, 甲地東風
12	5-5	大江萬里子, 箱守改造
13	6-5	箱守改造, 麦人, 佐長別智
14	8-5	佐々木三一郎 (NY)
15	9-5	
16	10-5	佐々木三一郎 (NY), 箱守改造, 森下良吉, 菅原芳助
17	11-5	麦人, 南八郎, 二宮 (NY)
18	'28-1-5	佐々木三一郎 (NY), KY



第3図 パサイック紡績工のストで演説する剣持貞一
 (『階級戦』4号, 1926.9.5)

護賀新車		桑港 日米新聞社		本社員 (ABC順)	
安孫子久郎	西山源一郎	安孫子康作	小笠原謙三	青柳國弘	大野乙吉
遠藤照治	佐々木平吉	浅野七之助	大野頼一	福地 篤	佐々木成三
府波かめい	佐々木勇平	原信太郎	佐藤利一	東 榮藏	清 由藏
日敷彦太郎	清 光慶	堀川昇次郎	島崎政太郎	一丸嘉久藏	清水幸助
石毛忠男	清水政雄	石井巖平	清水光三	石津實藏	四主本八郎
加藤さよ	鈴木和一	北村松之助	田原ひで	松井周次	武井武富
壬生三樹衛	寺田和助	宮木貞次	寺田照義	宮木義生	富田清萬
村田年男	上野 茂	中川 卓	渡邊哲四郎	中野房吉	脇水五郎
野澤與三郎	柳 渡	西方長平	横山秀三郎	西田一雄	吉田宣光

第4図 『日米』新聞社の社員名簿, 同紙1926年元旦号

安孫子の事業家としての各種事業への貢献とともに、日本町から敬意をもってながめられていた。社員の中には、のちに日本町の指導者、名士となる人物も多い。この社員名簿の順序自身が安孫子らしく、役職順でもなく、また印刷工や事務職員を排除したものでもなかった。

『階級戦』が創刊された1926年の日本町の大きな関心は、外国生まれの労働者を締めだそうという「外人登録法案」の去就であった。これは、1924年に議会を通過したいわゆる「排日移民法」(The Immigration Exclusion ACT, 1924)のように、日本人を狙いうちにしたものではなかったが、日本人労働者、とくに思想的に米国に好ましからざる左翼的労働者を排除するのに好都合であった。

『日米』は、「外人登録強制及送還法案」に反対する社説⁷⁾を掲げて、「自国の圧制より逃れて米国の自由を憧憬して渡米したる外国移民」に目を向ける。

さらに続けて3日後の社説で「帰化不能外人を父母とせる市民にたいして、市民権を剥奪」しようという移民法の修正案の提出に警鐘を鳴らした⁸⁾。早い話が、「帰化不能外人」

と認定した日本人や東洋人の子どもで、アメリカ生まれの場合、修正憲法によって、自然にアメリカ市民となっている日系二世からさえ、市民権（citizenship）を奪おうという乱暴なものであった。市民権を奪えば、次に送還（どこの国へ）ということになる。二世にとって祖国は、アメリカであるから、送還先はなかった。

移民で成り立っている米国は、移民法は国家存立の根幹であるという特殊事情がある。だれをもって「市民」とするか、ということは、誰をアメリカ人とするか、ということである。「アメリカ人」の大部分は、移民の子孫（二世か三世、または、その子孫）で形成されている。かれらが選挙権・被選挙を有して、米国の政体を成立させている。従って、移民法が国家基盤の根本になるわけで、常に状況に応じて修正・改正されてきた。

『日米』は、この一連の法案が、近年の「シカゴ市の不良外人駆逐問題⁹⁾」が背景にあるとしている。シカゴの「不良外人」というのは、いうまでもなくサツコとヴァンゼッティで知られるようなサンディカリズム等の外国人左翼グループの存在を意味している。勿論、「不良外人」は、思想的なグループだけでなく、ギャングや犯罪に手をそめる「外人」もいたわけだが、なにをもって「不良」とするか、という恣意的判断は、国家の手に委ねられていた。『日米』が心配するように、「少数の不良分子に対する移民法送還規定を励行するために、他の幾百万人の善良な外人に対して警察権を濫用する¹⁰⁾」ことになる。その『日米』も、社会主義者たちに対しては、「不良外人」と断じて、切りすてている。

日本町が、まず対応しなければならなかったのは、この人種差別にもとづく、移民法改正などの新しい動向に対してであったはずである。既存の日本語新聞と、社会主義グループの小さな新聞との対立ではなかったはずである。

『階級戦』創刊時の日本町

この月刊紙を生む土壌となった国際情勢も、日米両国の国内事情も、緊張がみなぎっていた。中国の国内混乱（広東の蒋介石・北伐開始と内戦）につけ込んだ日本など外国軍隊の介入、それに反撥した在米居住の中国人の反日運動や米国の一部世論の同情と、日本町にはきびしい風が吹き込んでいた。

労働運動や国際的な社会主義運動も活発化していた。大阪で再度の無産政旗の旗挙げとして「労働農民党」が結党していた。これは「評議会」系など左翼を排除しての「合法左翼」であったため、共産主義者との間には決定的な軋みを固定化したものだった。4年前に地下で結成されていた日本共産党は、直ちにコミンテルンから日本支部として承認され、錦の御旗を得ていたものの内訌、弾圧で力量は皆無だったが、いずれも米国内の日本人左翼には事情は伝わっていた。だが、『階級戦』が創刊された前後は、その同人たちも明確な組織方針があったわけではない。1926年秋の創刊時、その同人たちが、莫とした共産主義運動への

求道はあったかも知れないが、政党としての組織原則については、ほとんど無智、非力であった。

その初期の頃の紙面をみると、まず左翼青年の呉越同舟であり、労働運動情勢に対して無智であり、およそ文章や記事について訓練も経験もなく、発行の目的も散漫であった。手許に4号（1926年9月5日）以降しかないので、1～3号の内容は不明だが、大きなちがいはないだろう。執筆者を特定できる2、3人の人を除いて、無署名の記事だが、とても公正で客観的な説得力のある内容や形式とはいえない。

個人攻撃。例えば「大橋羅府領事クン、平原瓜畑でダンス会。吹きも吹いたり労働の体験」の見出し。念のため、記事の一部を紹介する。

「労働の体験！（ヘヘン笑わせやがる）が目的で大橋領事を始め羅府領事館員の一行は熱風渦を巻くインペリアルバレーで去る6月20日瓜摘みをしたと。たった一時間の瓜摘み！労働の体験が聞いてあきれらア。それを鳴物入りで報導するブル新聞の太鼓もち記者ども」、（いずれも現代用語に田村が近づけた）

悪態のかざりで、内容の評価は別にして、まずその稚拙で、個人攻撃的な文体に抵抗感をもつ人が多いだろう。インペリアルバレー（日本人は帝国平原、帝原と表記）、1930年代の統計だが、約2,400人の日本人、日系人が在住して農業に従事していた。10年で800人増加している。インペリアルバレーが、つとに有名なのは、その苛酷な自然環境だ。中心地のメキシコ国境に近いエルセントロでも灼熱の地獄。海面下の低地で、日本人やメキシコ人以外、入植を好まなかった。こんな条件下、やがて、ここで日本人をふくむ人種をこえた深刻な労働争議がおこる。

この記事の中でいう「ブル新」とは、ロサンゼルスで発行されていた『羅府新報』『加州毎日』の二つの日刊日本語新聞を指している。これらの新聞は、甲乙をつけることはできたが、相当数の発行部数、記者をもち、安定して日系コミュニティをカバーしている伝統的なエスニック・ジャーナリズムであった。コミュニティというのは、あらゆる階層、職業、年齢、思想・信条をこえたまとまりであり、そこで発行するエスニック新聞は、だからこそ、中庸・中立・商業主義を旨とする「不偏不党」を前面に立てた新聞であった。ほんとうに「不偏不党」であるかどうかは別として、誰にでも受け入れられる商業新聞であろうとしたことは疑いない。これは、日本国内でも同様である。

『階級戦』の第一の目的は、この「まとまり」を切り裂き、階級対立を日系コミュニティに持ち込むことであった。この目的は、当初達成できなかった。階級間の反目よりも先に、読者からの『階級戦』への生理的嫌悪感の方がまず先に現われた。

それは記事の中にもある。1926年8月6日、日本人会主催の講演会に、この『階級戦』をビラのように配布した。主催者は直ちに、主催者と無関係で内容が「一方に偏している」と反駁している。『階級戦』は「すべての闘争は一方に偏するを特徴とする。一方に偏せざ

るの闘いは闘いの意義をなさない」と教条的な解説を加えている。

日本町にとって、この時点でもっとも緊急の課題は、米国政府の「外人労働者締め出し」の法案への対処であった。国と国、白人と日本人など外国人との関係が、大きな議題であった。したがって、『階級戦』のブルジョアジーとプロレタリアートという階級図式が日本町に簡単に受け入れられる環境ではなかった。

“左右” 呉越同舟、初期の内容

『階級戦』の力量不足はいかんとも仕様がなかった。抽象的で教条的な「理論」を振り回すが、日本町の指導者への個人攻撃ばかりが目立った。そこで、編集スタッフたちは、自分たちの消化不良の階級理論が駄目だとわかり、レーニンや幸徳秋水の文献の要点紹介が始まる。

もっとも幸徳秋水の文献は、平民社解散して渡米するにあたり、岡繁樹宛に助力を求めた書簡で、いわば古証文の紹介。幸徳が、経済的に困窮し、家族を実家にあずけ、16歳の甥を同伴して米国で仕事の紹介を依頼したものなどだ。ともあれ、『階級戦』は、その意気込みにそぐわず、印刷すべき情報や資料に欠け、執筆者たちの粗雑な雑文で埋めたという感がつよい。

片山潜のモスクワから手紙が、7号（1926年12月5日）から掲載され始める。これはオリジナルのもので、それなりのニュース価値はあった。片山が『階級戦』の発行を知って、書き送り始めたようである。アメリカの日系左翼にとって、運動は片山潜ぬきでは語れない。片山は、自からもアメリカで長年過し、大学に学び、米共産党の成立にかかわるとされ、多数の日系青年を教育した。日本人・日系人の党組織が完成して以降、コミンテルンの連絡役、ソ連の国益の代弁者として謎の役割を遂行し続けた。米国の日本人・日系人の家庭や大学アーカイブスには、片山潜の夥しい数の手紙が残存している。未発見のものも多い。

片山潜の手紙を読むと、まずソ連の様子、モスクワの生活、コミンテルンの方針などを伝えること、つぎに日本から米国へ到着した日本の総合雑誌、出版物の入手依頼、日本事情の蒐集などがあった。コミンテルンも片山も、日本から直接情報を蒐集することが、日本の軍国主義体制が強化される中で、日本分析が極度に困難であったため、海外（米国、中国、ヨーロッパ等）で情報蒐集活動をおこなった。日本人が多く、日本との往来も頻繁だった米国は、すぐれて格好の情報基地であった。

片山のロシア共産党の内紛を伝えた手紙が最初である。レーニンのボルシェビキと、その反対各派の争いが伝えられているが、興味深いのは、抗争に敗れた反対派の指導者があいついで、レーニンによって、各国の大使等に左遷されている報告だ。まだスターリンのような血腥い大量銃殺など反対派への粛清はなかったことだ。

剣持貞一の役割は、どうだったのだろうか。加藤哲郎氏の研究¹¹⁾によれば、1923年7月渡米してすぐの24年に米共産党に入党している。カール・ヨネダは1925年バークレーで日本人労働協会を組織したと述べている¹²⁾。生活は日雇い労働、翻訳などしていたようだ。日雇い労働だけが目的ならバークレーではなく、オークランドやサンフランシスコに住んだであろうが、学業への志も強く、英語力もあったようだ。

この日本人労働協会は、いわば一世党員の外郭団体、隠れ蓑で、日本人の多いニューヨーク、ロサンゼルスなど数カ所に組織された。『階級戦』は、このサンフランシスコ組織の新聞で、剣持のイニシアチブで発行された。バークレーは、サンフランシスコに比し、カリフォルニア大学もあり、日本からの留学生、その予備軍が多く、活動しやすいと考えたのかも知れない。ただ、『日米』新聞社が発行した『日米住所録』(The Japanese American Directory) 1926年版(No. 22)を見るかぎり、池田豊耕(秀雄)、剣持らの名はない。日本町の体制からはずれているか、まだ住所録に氏名を記するほどの成人になっていなかったようだ。『階級戦』は、2号でゆき詰り、剣持は池田の力を借りて3号以降を出したという。

当初、剣持は表面に出なかった。しかしその活動力、知識、雄弁さで、『階級戦』の代表格であったことは疑いない。第4号1面に、剣持がバサイク紡績工のストライカーの前で「日白労働者」の連帯を訴える写真が印刷されているが、前述のようにこれは、まぎれもなく剣持である。

日本人労働協会は、左傾的な青年が中核だったが、すべてが党员だったわけではない。従って『階級戦』の執筆者も千差万別である。

その一人に西村義雄(閑太子)がいる。西村という人物は謎が多い。労働関係記事の各種の新聞に多く寄稿し、また関係したが、党员ではなかった。むしろ、党员からはやや胡散臭く見られてもいた。ニューヨーク、ソルトレークシティ、サンフランシスコ等にその活動の痕跡を残している。1918年前後、ソルトレークシティで『協友時事』を発行した。これは日本人労働協友会という相互扶助団体の機関紙、1923年にはニューヨークで日本人労働協会の機関紙『労働の力』の編集者になっている。双方とも、僅か7号が残存していたにすぎない。

しかし、西村は、ライターとしては、『日米』などの「ブル新」、『階級戦』など多種の活字媒体に寄稿、第2次大戦で日本語新聞の発行が停止させられた時期には、発行を許されたソルトレークシティの『ユタ日報』で記者として働いた。

その西村は、『階級戦』にレーニンの「社会主義と宗教」の紹介文を書いている。山辺清の訳に補足文を加えたもの。ロシア語ができたわけではない。西村は、『協友時事』の創刊も日本人労働者のアメリカでの客死などが動機のひとつであり、晩年は、自から「墓守り」を称して、日本人墓地の保守にあたったように、独自の宗教観をもった労働ジャーナリストであった。労働ジャーナリストであるから、翻訳者、理論家、オルガナイザーのいずれでも

なく、ライターとして『階級戦』にも、同紙が目の敵にした「ブル新」の『日米』新聞にも寄稿した¹³⁾。

ソ連で銃殺された執筆者たち

それに対して、箱守改造は理論家で、『階級戦』にいつも長文の論文を執筆した。7回連載の「搾取手段の発達と在米同胞」は、堅い文体ながら相当の論理的文章で、科学の宗教に対する優位を力説する。

本名、箱守平造。1891年生まれだから論文執筆時は、36歳。のちソ連へ「亡命」して、スターリンにより銃殺されている。

もう一人、初期『階級戦』の寄稿者の主役になったのが福永麦人（與平）。福永も34歳。それなりに米国に定着していた。かれも共産党員であったが、その筆名麦人（バクーニン）でも判るように、マルクスを批判し、プロレタリア独裁に疑念をもつアナキズム派のバクーニンに心酔していた。この流れから、『階級戦』紙上では、大逆事件関連の記事を書き、幸徳秋水一派の記録を紹介している。とくに、平民社坐折後、米国に在った幸徳秋水の足跡に注意を払ったが、福永が、その時期に、米国で幸徳に接触したわけではない。幸徳と同郷で親しかった岡繁樹を通じての資料や情報である。痛ましいことに、福永も、ソ連に渡り、「血の粛正」で銃殺された。

それはさておき、『階級戦』は、多様な思想に立脚し、「左右混然」とした記事が同居していたのである。このサークル誌にも似た自由な論陣は、いつまでも続かなかった。さっそく論争である。

7号に「鬼狂生」の名で執筆した長文のメッセージ「正しき叫び」が問題化する。これは、ブルジョアの中にも「正しき」ものがある、として日本の社会主義の中に、広い文化主義があるか、とその偏狭さを批判したものである。この「鬼狂生」、キリスト者であること、在欧中に革命直後のロシアに入ったこと、ロシア通であることがわかる。山辺清の可能性があるが、人物の特定化作業も、もうすこし先に延しておきたい。

この文章に対して、第9号で高木不可止、南八郎の二つの反駁論文が現れる。

まず前者の論文は、鬼狂生が、プチブル的な自由主義で、階級闘争の立場から容認できないこと、この思潮を放任できない。ロシアがキリスト教の理想になったりすることはありえない。この自由主義を放逐するという実践的克服が「吾等革命共産主義者の任務」だと、強圧的な論旨だ。これは共産主義者の常套のスタイルでもある。

南八郎、羅府の日本人病院の医師のようである。共産主義の文献にも通じているようで、これらに依拠して批判する。鬼狂生のように「左顧右盼」する必要はない、と、切り捨て、「理論的基礎工事」に努めよと、提言している。

『階級戦』の編集後記は、「鬼狂生」の反論原稿を期待したが、反論はなかったようである。山辺清だとすると、まもなく帰国している。

『階級戦』は、8号（1927年1月5日）から、発行所も同じマーケット通りの1212番地の私書箱3726と明示したが、11号から再び印刷所を変えている。その理由は、後述するが、日本労働協会の中の有力メンバーの支援が得られなくなったからだと考えられる。山辺もその一人だろう。5月号は、満1周年記念号と予告したものの、同号は無署名の長文の論文、おそらく編集長の剣持のメーデーの歴史と意義を述べたもののほかは、見るべき原稿が見当たらない。編集だよりも、1周年を「記念する為に特別号を出すことにした。初め少くとも8頁にする筈であったが、原稿不足と時日のないために6頁とした」と苦衷を述べている。これも教条主義が表面化した所産だった。編集者の交替もあった。

同紙の経営的苦境の背後には、「排日移民法」と、それに続く、日本人労働者や新たな移民労働者への圧迫、米国経済の不況と、日本人労働者の失業や生活苦があった。同人も変りばえがなかった。加えて、中国大陆での日本軍の侵攻拡大と、中国民衆の反日気運は、米国に在住する中国系移民の同調となり、労働者の間でも、しっくりゆかなかった。日本国内の左翼勢力への弾圧も、逐一、日本語新聞で伝えられていた。『日米』はじめ大手の日刊新聞は、「電通」を通じて日本のニュースは入手していたからである。

日本電報通信社の上田碩三専務も、1927年ジュネーブで開かれた国際新聞通信会議に出席のあと桑港を訪れ、日本語新聞関係者と会談している。上田は、往路シベリア鉄道でヨーロッパへ向う途次、モスクワの片山潜に面会取材を希望したが、ロシア政府によって阻止されたと伝えている。

「サンジカリズム処罰州法」の牙

片山潜はモスクワに在って、コミンテルンの幹部ではあったが、ロシア政府にとっては外国人、それもアメリカ生活の長い日本人であった。ロシアが彼に全幅の信頼を寄せていたかどうかあやしい。電報通信社の上田もそう伝えている。ロシアの共産党自身が、その体内に様々な反対派、不満分子を抱え、アメリカ共産党も内紛につぐ内紛で力量はなかった。

片山潜は、コミンテルンの意に沿う形で、海外日本人共産主義者と連絡をとるよう努めていたが、決して安定的・組織的なものではなかった。アメリカでは複線的なルート、それも郵便を主とするコミュニケーションであった。その一人が、旧知の西村義雄であった。西村は、共産党員ではなかったが、だから逆に自由なジャーナリストの立場を利用して、情報を集め、片山と連絡をとりあうことが可能であった。

片山も『階級戦』に手紙を寄せた¹⁴⁾。

「今日のメールで紐育の西村義雄兄から4月5日発行の階級戦を受取った。之が2回目で

ある。僕のモスクワ通信が連載されているのを見た。茲に階級戦に直接通信したくなった。僕の義務であるように感じた。桑港と云えば初めて上陸した所だ。其処から発行される我党の機関紙を読むことは第二の故郷の報知に接する気持がする」(要旨)

この片山の望郷の想いを込めた手紙が掲載された15号は、またアメリカの社会主義運動に一時期を画すサツコとヴァンゼッティという二人のイタリア人アナキストが処刑されたことを急報する紙面で占めたことであった。無実とされるこの二人の処刑は、米国の社会主義者、とりわけ外国生まれの共産主義者に大きな衝撃であった。法を口実に、よもやの死刑執行が、現実のものとなったのである。アメリカもまたもっている残酷な一面を見せつけた。

『階級戦』は、14号(8月5日)、15号(9月5日)、全頁を使って、処刑に抗議した。ボストン牢獄前の抗議集会では、一挙に125名が拘引されたと伝えている。抗議運動の主役は、IWWから共産党に移っていた。

アメリカにとって、「外国生まれの労働者」の処遇は大問題であった。それは、政府の立場とは別に民主的権利を擁護しようというアメリカ市民にとっても、社会主義運動の側にとっても同様であった。

まず政府の側。

すでに触れたように、移民で成立しているアメリカは、誰をもって市民(国籍)とするか、は大問題である。アメリカ生まれの男女に市民権を与えること、移民してきた外国人に一定の要件で市民権を与えること、この二つが基本だが、「一定の要件」とはなにか、ということになる。

1924年の移民法では、さらに移民に合法的移民か非合法的移民かの区別をすることにしたが、これは明らかにアジアからの移民と、メキシコからの移民とをマトにしたものだった。

ところが、このアジアとメキシコからの移民労働者のもっとも多く、影響を受けているのがカリフォルニア州で、偏見と差別は、もっとも激しかった。これらの労働者の加入を断固として拒み続けているAFL(労働総同盟)が1927年10月の大会を、わざわざロサンゼルスで開催したのも、AFLの姿勢や方針を内外に示すためであった。この大会ではグリーン会長が、ファシズムと共産主義を全体主義として攻撃し、AFLへのコムニズムの浸透を阻止する提案は支持されたが、問題は「アジア人」の定義であった。当時、フィリッピンは米国領だったため、フィリッピン労働者をどう扱うかで一致できなかった。フィリッピン労働者から「アジア系労働者」の名称をはずして、島内の労働者の労働条件改善を支持する、と決めたかと思うと、フィリッピン人が契約労働者として自由にハワイに移住し、さらに大量にカリフォルニアへ転航し、白人労働者の仕事を奪うものとして問題になった。加州代議員からAFLの次期大会で、フィリッピン人の入国禁止と、フィリッピンの独立を支援するという決議案が可決されている。なんともちぐはぐな、矛盾と一貫性に欠けたAFLの決定であった。

このようにカリフォルニア州の排外思潮は桑港の日刊紙『エギザミナー』など一貫した外国人への偏見の助長とあいまって、同州の強い姿勢であった。したがって、連邦法の移民法による外国人排除だけでは、不満であった。

そこで、悪名の高い州法通称、「サンジカリズム法」(California Criminal Syndicalism Act)が生まれる。この州法は、移民法より厳しいもので、外国人(alien)に対して、入国拒否と、本国への送還(deportation)を明記したものだ¹⁵⁾。この法律、「刑事サンジカリズム法」とか、辞典(ランダムハウス)によっては、「犯罪的サンジカリズム法」と訳されているが、「犯罪的」と頭につけることによって、読者に予見を与えかねないので、本論文では、たんに「サンジカリズム法」または、「サンジカリズム処罰法」としている。

全米から集められた約1,000人の外国人労働者がニューヨークで送還のために汽船を待っているというニュースや、1人の日本人が、このサンジカリズム法違反で送還されたという報道もあった。人名は、まだ特定できていないが、山辺清と推測される。送還ができないアメリカ生まれの二世の共産党員には、相当長期の懲役刑がいい渡されている。1927年には、オークランドの活動家ミス・アニタ・ホイットニーに対して、大審院は1年から14年の不定期刑を宣告している。理由は1919年に社会党内部に生まれた共産労働党が暴力革命を綱領にしていたこと、彼女はこの綱領には反対だったが脱党せずIWWを支援したことによる、とされる¹⁶⁾。

この強圧に対して、アメリカ市民の中に悪法に反対し、犠牲者を救援する二つの組織が生まれている。

ひとつは、無党派の「米市民自由連合」(ACLU=American Civil Liberties Union)、もうひとつは、共産党の組織した「国際労働者擁護連盟」(ILD=International Labor Defence)である。この団体については、別に述べる。

ILDが日本人労働者の中に紹介されるのは、『階級戦』11号(1927年4月日)に、ニューヨークの荻野誠也が紹介文を寄稿してからである。

ACLUは、加州の「サンジカリズム法」が、マサチューセッツ州など次第に拡大の傾向を帯びてきたことに危惧をもち結成された。1927年には、34の州で動きがあるとしている。ACLUによると、全米で1,500人の市民が戦時中の意見表明などで有罪を宣告されたり、選挙権を取り上げられたり、服役したりしている。また職業上の資格等を無効にしている州もある。とくに「サンジカリズム法」で服役している人数は、カリフォルニア州で16人、テキサス州で1人と伝えている¹⁷⁾。

ACLUのような自立的団体は、アメリカのお家芸で、社会運動家だけでなく、法曹界、キリスト教会、コミュニティ運動、研究者やジャーナリスト、一部の企業家が寄付をもって参画している。ACLUは、在獄中の活動家やその家族、また保釈金や公判費用を用立てる基金の充実に力を注いだが主な力点は、法曹的支援である。ACLUの年次報告書では、1926年

に2,775人のアメリカ人が拠金に拠っている。

その内容は、1～5ドル1,077人、6～10ドル440人、11～25ドル368人、26～50ドル75人、51～100ドル27人、101～250ドル19人、251～1,000ドル15人、1,000ドル以上1人である。また、その活動を周知させるために週刊の機関紙 *The Open Forum* も発行した。カリフォルニア州では「サンジカリズム法」がもっとも猛威をふるい、やがて日本人労働者の上に災難がふりかかってくる。その際 ACLU が、保釈金や裁判費用等を用立てたのである¹⁸⁾。

劔持たちが、ACLU の支援を受けることになるのは、もうすこし後である。

このアメリカ的市民運動である ACLU に対して、ILD は、明らかに共産党の外郭団体であった。ILD は1925年に設立されて以来、サツコ・ヴァンゼッティ事件は勿論、カリフォルニア州のアニタ・ホワイートニー事件など数多くの政治裁判に関った。その組織は、ACLU と同様、個人と団体からの寄付による救援組織であるが、ACLU のちからには較べものにならない。共産党独自のもので、やがて日本人部が形成される。『階級戦』14号（1927年8月5日）は、ILD に東洋人部を組織中だったが、「日本人の会員が一定の数」になったため「特別に日本人部を設けた」と伝えている。

その4カ月後の12月には、ILD 桑港支部で獄中等の犠牲者を救援するクリスマス・バザーが開催され、多額の現金や物品が寄せられた¹⁹⁾。宗教を蛇蝎視しても、金銭物品には逆らえない。なぜ、日本人労働者が急速にILDに結集したのだろうか。それは「クリミナル・サンジカリズム法」(CSA)の暴威を目のあたりにして、左翼の労働者だけでなく、労働運動にたずさわっている活動家が強い不安を感じはじめたことにある。同法は、容赦なく外国人労働者を取り締り、市民権をもつ者は牢獄に、市民権のないものはどんどん国外追放（主として出生国）をはじめていた。

日本人の左翼や活動的労働者は、それを阻止する有効な術がなかった。日本政府や在外公館は日本人の不穏分子に冷淡、あるいは抑圧的でさえあったし、身を守ろうとすればACLUやILDに頼るしかなかった。ACLUに頼るには、英語力を必要としたし、左翼に特別の理解があるわけではなかった。ここに、ILD、その言語別末端組織であるILD日本人部の存在が浮上する。

『階級戦』の漂流

『階級戦』の意味も変わろうとしていた。

『階級戦』は、日本人労働協会の中の共産党員である劔持貞一と、1、2の同志によって、個人的努力のもとに、その機関紙の形で生まれた。共産主義者にとって、日本人労働協会も『階級戦』も、いわば隠れ蓑として使われたが、そのために日本人労働協会の中の非共産主義者の自由な発言も掲載される破目になった。それが「鬼狂生」事件であった。これは劔持、

箱守らの党員にとっては我慢のならないことで、手きびしい批判が紙面に現われることになる。自然、これら非党員労働者が離れることになり、『階級戦』は、読者を減らし、経営危機を招くことになる。

劔持らは、そこで「プチブル的」な寄稿者を阻止（排除）するため、『階級戦』を日本労働協会の機関紙から『階級戦』社という新聞社の新聞の形式に衣替えすることになった。これなら「編集権」を発動して一方的な原稿や記事だけのせることができる。同時に、発行所も印刷所もかえ（変更せざるをえず）、共産党のダミーとして、自由に操れるものにするに成功した。

『階級戦』社は、党のダミーとしては成功した。一貫して、党のプロパガンダの道具にすることになった。ところが、自然、読者も寄稿者も、日本人労働協会の普通の労働者メンバーから、もっと先鋭的な分子の集団に移っていった。

そもそも新聞のターゲットはどこにおこうとしたのか。英語のわからない日本人労働者である。日本人労働者は、その語学力の問題から、日本人経営の安宿、桂庵と呼ぶ手配師、ボースと呼ぶ日本人監督のもとに固まって働き、日本食品、日用商品、県人会の集る日本町に集中して住んでいた。遠く離れた鉄道、炭坑、農場、缶詰工場等でも同様であった。したがって、その情報源は『階級戦』が「ブル新」と呼ぶ『日米』『新世界』『北辰』（桑港の場合）、『羅府新報』『加州毎日』（羅府の場合）であった。『階級戦』は「ブル新」の記事を目の敵にして攻撃して、ブルジョア社会の影響を断てると考えた。たしかに「ブル新」は、日本町の出来ごと、アメリカ社会の動向だけでなく、「電報通信社」と通じて、日本のニュース（政変から大相撲まで）を伝えていたので、情報環境そのものは、日本と変りなかった。日本人労働者は、英字の現地の新聞を読むことはほとんどなかった。

この「ブル新」攻撃は、大きくもない日本町、日本人コミュニティにあっては、個人中傷になりやすく、日本町の指導者と、左翼のリーダーとの間には、決定的な溝が出来ていた。

日本人にとって、緊要なはずの米国の排日政策に、双方とも有効な対応の手だてがつかせなかったのである。そこにCSA法が牙をむきだしにした行動をおこしはじめ、劔持ら日系党员たちをうちのめすことになる。ゆき詰りは明らかだった。『階級戦』は1928年1月、18号をもって終刊となる。

注

- 1) カール・ヨネダ『がんばって』（大月書店、1984年）には、ヨネダを中心とした『労働新聞』の活動が紹介されている。
- 2) 「けんもつ・さだいち」を追跡している加藤哲郎氏の研究。同氏の著作、研究、ホームページに負うところが多い。
- 3) 米国共産党のホームページ。
- 4) 同上。

- 5) K. ヨネダ, 『在米日本人労働者の歴史』前掲 66 頁, これは阿部ジョージの言。
- 6) 田村「1924 年, R. パークの“日本人調査”」, 『図書』岩波書店 1994 年 9 月。
- 7) 『日米』1926 年 1 月 20 日。
- 8) 『日米』1926 年 1 月 23 日。
- 9) 『日米』1926 年 3 月 6 日。
- 10) 同上。
- 11) 加藤哲郎氏のホームページ。
- 12) カール・ヨネダ『がんばって』大月書店, 1984 年, 32 頁。
- 13) 西村は, 4 カ月ほど前の『日米』(1926 年 9 月) にも「層塔の下走る大衆」という記事を連載した。『階級戦』に執筆している文調と同じように資本の横暴, 労働者の貧困, 女性の権利, 支那の革命など執筆した。しかし, 『階級戦』の主流をなす過激な文体, 個人攻撃, 教条的な断定などない。西村は, この時期フリーの記者であるから, 「ブル新」編集部の嫌悪する方法, 読者のアレルギー的な反撥の文体は避けていた。この姿勢は一貫している。
- 14) 『階級戦』15 号, 1927 年 9 月 5 日。
- 15) 1917 年, 1924 年の移民法では, 思想信条による排除は強くなかったが, 加州の州法(クリミナル・サンジカリズム法)以降, 連邦法でも強化されてゆく。1939 年の Hatch 法, 1940 年の Voorhis 法, 1947 年の Taft-Hartley 法, 1950 年の McCarron 法と戦後まで続く。とくに 1947 年法では労働運動からの共産主義的リーダーの排除, 1950 年法では活動の登録要求が織り込まれた。1950 年法で, 「帰化不能外国人」として長い間, 市民権が拒否されていた多数の日本人一世など, アジア系の人々の市民権が認められたのは皮肉である。
- 16) 『階級戦』13 号 1927 年 6 月 5 日。
- 17) Free Speech 1926, ACLU. NY.
- 18) 「州法クリミナル・サンジカリズム法」は, IWW のメンバーを中心に 128 人を刑務所に送ったが, 1968 年に米最高裁が違憲判決を下して廃止されるまで生きていた。
- 19) 『階級戦』第 18 号, 1928 年 1 月 5 日。